

# 炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

写真と文 池内文藏



## 第十四話 大和高取

玉串川のEEZ（排他的經濟水域）を巡る攻防戦で初陣を飾った楠木正成は、ほどなくして父・正遠に代わり楠木党の陣頭に立つようになった。まずは、八尾氏最大の支援組織で、摂津の国渡辺津（現在の大阪市）に拠点を置き、瀬戸内航行に大きな影響力を持つ渡辺党を、楠木傘下の水走党（河内）・和田党（和泉）とともに摂津江口（現在の東淀川区）の戦いで破った。正成は、共に歓心寺で学んだ大塚惟正とともに四天王寺や難波宮跡でゲリラ作戦を展開する渡辺党をじわじわと追い詰めた。大塚は、神宮寺などと同様、楠木の一族であり、河内国丹比荘（現在の松原市）一帯を統治。現在も府立大塚高校にその名を遺す。楠木党に敗れた渡辺党の多くは瀬戸内海に散って行った。

正成率いる楠木党は畿内を転戦した。最も多く出陣したとされるのは、紀州湯浅党の叛乱だった。紀州には大塚同様歓心寺の寄宿舎仲間である橋本正員らを率いて熊野街道を南下した。橋本もまた楠木一族で、泉州日根野荘（現在の泉佐野市）一帯に拠点を置いた。これらの戦いは全て鎌倉幕府の京都に於ける出先機関・六波羅探題より発せられた命であった。

平安期、度々行われた王族による熊野詣には多くの源平一門が随行した。街道筋には天皇・

上皇らが宿泊する寺院を中心に宿場街が栄え、古代豪族の末裔を称する者らを取り仕切り、これらの館は藤原摂関家の末葉や、源氏や平氏の一族の宿舎として提供された。かれらは山海の幸と酒で都人をもてなし、夜伽には娘を差し出した。娘の居ない者は村娘を即席の養女とし、間に合わない場合はみずからの妻女を差し出した。

かれらは、貴人の精子を欲した。

そうして紀伊半島一円に撒かれた胤のなかから、源義朝の十男で、治承寿永の乱（源平合戦）の端緒となる「以仁王の令旨」を全国の源氏に撒いた源行家（新宮十郎）や、平清盛の末弟で、一門随一の武勇を誇った平忠度（薩摩守）らが現れた。忠度は武芸とともに歌道にもその才を発揮した。

ゆきくれて 木の下かげを宿とせば

花よ今宵の 主ならまし

「旅宿の花」と名付けられたこの和歌は、一の谷の戦いで討ち取られたかれの懐中に抱かれていた辞世の句であり、その才を惜しんだ歌友の藤原俊成が「詠み人知れず」として勅撰和歌集に収録した。余談ながら、木曾義仲軍によつて都落ちを余儀無くされた忠度は俊成に和歌を託した後、生まれ故郷の熊野へ募兵に向かった。木曾軍はこの平家随一の武人を逃がすまいと義仲の義兄で副将格の樋口次郎兼光を追っ手に差し向けた。忠度ら一党は紀州街道（旧国道26号線）で捕捉された。この時、忠度の嫡男・忠行が踏み止まり、木曾軍と交戦、時間を稼いだ。父を逃がした忠行はわずか二十一歳で散った。かれの遺骸は、土地の者らが手厚く葬った。その場所は「忠行の岡（墓）」と呼ばれ、こんにちも大阪府下一小さな町・忠岡町としてその名を留めている。

湯浅党は、はやくから平家に仕えた。伊勢平氏が「平家」へと躍進するきっかけとなった平治の乱で、熊野詣の途上にいた平清盛がいち早く京都に戻り、源氏と雌雄を決するに至ったのもかれらの力だった。清盛の栄達とともに湯浅党もその勢力を拡大した。やがて清盛が没し、平家一門は木曾義仲によつて西国へ追われた。そのなかから二人の公達がかれらを頼って落ちて来た。三位中将維盛・丹後侍従忠房は清盛の嫡男小松内大臣重盛の長男と六男で、僅かな従

者と共に屋島（香川県）から紀伊水道を渡って来た。兄の維盛は重度の鬱病だった。父重盛の早世により、清盛が父の異母弟・宗盛を後継者に据えようと、重盛の子息たちは一門の枝葉として扱われ、その頃、伊豆で挙兵した源頼朝や北陸道を攻め上る木曾義仲追討の名目上の大将軍として派遣された。維盛は連戦連敗し、祖父清盛はかれを許さぬまま死んだ。

湯浅の地にまだ年端のゆかない異母弟を残し、維盛は紀伊山地に入った。かつて「光源氏の再来」と噂され「黄梅の少将」と詠われたその美貌は里人たちを虜にした。現在も紀南地方では三人に一人ぐらいの割合で「維盛の末裔」を名乗る。かれは紀伊山地のあちらこちらに胤を撒いた後、高野山で仏門に帰依し、那智勝浦の港から「補陀落渡海」を遂げた。平家一門が壇ノ浦に沈んだ後、その末葉まで根絶やしにせんとする鎌倉の落ち武者狩りは熾烈を極め、平家が経済基盤とした伊勢や紀伊には西国の有力御家人が遣わされた。湯浅党は悪七郎兵衛景清ら壇ノ浦の生き残りとともに忠房を護り戦った。かれらの戦意が落ちない事を悟った頼朝は忠房に手紙を書いた。

―侍従どのの年の頃、平治の戦で囚われ、斬られるはずだった私は、貴殿の父・重盛どのに一命をお助けいただいた。この御恩、終生忘れぬ。鎌倉に下向賜り、昔語りなどは是非―

景清らの反対を押し切り、鎌倉に下った忠房は、頼朝と語り明かした後、消された。頼朝は、恩は忘れていなかった。が、平家の残党のいずれかが「第二の頼朝」になる萌芽は摘まねばならなかった。頼朝が死ぬと、その義弟・北条義時は、忠房の異母兄・資盛の遺児・盛綱らを保護し身内人とした。盛綱の孫・頼綱は八代執権・時宗の嫡男・貞時の乳母となり、その外戚である御家人筆頭の安達泰盛と対立、御家人対身内人の戦いは鎌倉を火の海と化した大規模な市街戦「霜月騒動」へと発展し、身内人が勝利を収めた。安達氏の所領は没収され、功のあった身内人に分配された。その一つ河内の歎心寺荘を与えられたのが、楠木正成の祖父・親遠だった。親遠もまた頼綱同様、執権北条氏の嫡流「得宗家」の身内人「得宗家被官」であり、その祖は駿河目代・橘氏の一族に連なり、維盛らが水鳥の羽音に驚いて逃げたとされる「富士川の戦い」の前哨戦で、甲斐源氏・武田信義らによる奇襲によって一族の多くが討ち取られた。この時、たまたま武田の陣に頼朝の遣いで来ていた当時まだ「江間小四郎」を名乗っていた北

条義時がその遺児らを匿かくまったと考えられる。かれらは義時の下で時には汚れ仕事などを請け負い、北条得宗家の権力基盤を造成した。頼朝挙兵以来の最古参の御家人・安達氏に壊滅的打撃を与えた身内人筆頭・平頼綱は「内管領ないかんれい」と称し、恐怖政治を行った。

この頃、鎌倉幕府創設の基礎であった「御恩と奉公ごおん ほうこう」は既に崩壊していた。

平安中期、増えすぎた王族に対する処遇が朝廷の財政を司つかさどる藤原氏の悩みの種であった。同時にかれら「貴族」の末葉もねずみ算式に増え、権力闘争に敗れた一族は、坂東ばんとうの地に、或いは西海さいかいの果てに追い遣られた。帝の子弟のうち、限られた者だけが「皇太子」になる資格を持つ「親王しんのう」の宣下せんげを受ける事が出来た。その他の「王」たちは「臣籍降下しんせきこうか」して「源」「平」の姓が与えられ、藤原氏の末葉とともに国司こくしとして地方に遣わされた。その代表格が、清和天皇の皇子貞純親王の一子・六孫王ろくそんのう（源経基）に始まる清和源氏、桓武天皇の皇子葛原親王の孫・高望王たかもちおう（平高望）に始まる桓武平氏だった。野に下ったかれらは自活の為に荒野を開墾し、その土地を護る為に武装した。「武士」とは、「武装した農場主」であり、「土地」こそがかれらの「魂」だった。坂東の武士たちは、土地を巡って争いを繰り返した。代表的な争乱「平将門まさかどの乱」は、高望王の孫の一人である平将門が「新王しんのう」を名乗り、不満分子を集めて中央政権に仕掛けた独立戦争であり、朝廷は同門で伊勢平氏の祖となる平貞盛たいらのたけもりや、藤原氏の末葉で、後に奥州藤原氏をはじめとした多くの後裔こうえいを遺す藤原秀郷ふじわらのひでさと（田原藤太）らに鎮圧ちんあつを命じた。

貞盛の子孫は、伊勢を根拠地に瀬戸内の交易や海賊掃討で力を着け、忠盛・清盛の代には藤原摂関家と肩を並べるまでに至った。が、皇室と結び付き藤原氏以上に「驕おごる平家」となったその栄華は長く続かず、北条・三浦・千葉などの「坂東平氏」が、平治の乱の敗戦によって伊豆に流されていた河内源氏（清和源氏の一流）の嫡流・源頼朝を担ぎ、平家を滅ぼした。

頼朝がかれらに約やくしたのは「土地の保障」|| 「御恩」と「鎌倉殿への忠誠」|| 「奉公」だった。「奉公」を重ねる度に、彼らは新たに土地を得た。平家追討によって得た西国の地が分け与えられる事によって、瘦馬やせうまに解ほつれた胴丸姿で馳せ参じた武士らが一躍一国の主となった。頼朝とその子らによる源氏将軍が潰えた後、後鳥羽上皇ご とう ばじょうこうが「打倒・北条義時」をスローガンに起こした「承久じやうきゆうの乱」においても、西国の上皇方から没収した土地が戦功者に与えられた。その後も、陰謀いんぼうと肃清しゅくせいが繰り返された鎌倉期に於いて、討伐対象の土地は奉公者のものとなった。この原理原則が崩れたのが「蒙古襲来もうこうしゅうらい」|| 「元寇げんこう」だった。九州・博多に馳せ参じた武士たち



ストである連署若しくは幼少得宗の代理執権を最後に引退し、金沢文庫での悠々自適な老後を楽しみにする現代にも通じる官僚氣質の男だった。

河原で石投げに熱中する弥四郎をみて

「そういえば、貴殿の御弟君も、初陣は投石で勝たれたと聴く。対戦した西園寺の（平野）将

監殿は―あれぞ正しく諸葛亮―と感嘆しておった」

「お恥ずかしい限りにござる」

俊親は、年下の若公家の隣で溜息を吐きながら、最後に弟と会ったのは、かれが弥四郎ぐらいの歳の頃だった事を思い返した。あの後俊親は身内人嫡子の務めとして鎌倉に下った。足利を始めとした御家人の嫡子らが皇族將軍の御所に配属されたのに対し、俊親は内管領の館で、やがて執権となる高時の遊び相手が主な任務だった。遊び相手ならまだましな方で、同じ身内人でも尾藤や諏訪といった上位の者は高時やその弟たちと机を並べ勉強に励んだのに対し、俊親は高時が愛玩する犬の世話のみという無為な一年を過ごした。

石を投げていた弥四郎が、ふと手を止めた。何かを感じ取ったのか小さな身体が小刻みに震えている。近寄って肩を抱くと、息子はその腕を強く握り締めた。桂川に掛かる橋の上で、民がざわめいている。俊基が小走りに橋に近付き、その様子を一見して戻って来た。

「犬だ」

橋の中央を、公家並みの豪華な布を纏った土佐犬が欄干にへばり付かんばかりに恐れおのく民らを睨み回しながら我が物顔で渡ってゆく。西国の何処かの御家人が高時とその背後にいる長崎らのご機嫌取りに贈った犬であろう。昨今はこの様な光景をよくみるようになった。六波羅ではさすがに犬の世話は命じられなかったが、次々に送られて来る犬の世話をする下級役人らをみて胸が痛んだ。

六波羅から火急の呼び出しが来た。俊親は弥四郎を俊基に預け、馬を駆った。六波羅に近い鴨川の堤には、戦から帰ったばかりと一目で判る者たちが屯していた。門前に馬を繋ぎ、主殿に続く回廊を急いでいると、向こうから不貞腐れた顔の大男が命令書と思しき紙片をひらひらさせながら近付いて来た。

「則村どの」

男は、播磨の御家人・赤松則村（後の円心）だった。

則村は「おう」と応じて、大きな溜息を吐いた。かれの実弟円光は俊親の同母妹・るいを妻にしており、義兄弟の付き合いだ。三度の飯より戦好きのこの男が全く乗り気でない顔をしている理由を俊親は即座に察した。

「やはり大和でござるか…」

「越後（北条時敦）め、解っておるくせに」

則村は出てきたばかりの主殿を忌々しげにみて呟いた。庭には、先ほど桂川の橋で見かけた

土佐犬が、貞頭の謁見の場へと引かれてゆく。貞頭の役目であり楽しみの一つが、古今東西の書から得た知識による「犬の名付け」だった。犬が増える度に御家人はその餌代を徴収された。断れば「謀反」として探題の兵が差し向けられた。「御恩」が霧消した時代の御家人らは、黙って「奉公」するより他なかった。楠木や八尾のように河川を活かした物流など大口のシノギを持つ者らには微々たる出費であったが、農耕という旧来の生業しか持たぬ者にとっては死活問題だった。そんななか、六波羅の徴収役人に「否」と返答した老将が大和の国高取（現在の奈良県高市郡）にいた。男の名は

### ―越智源太―

越智氏は、清和源氏・源（多田）満仲の次男・頼親を祖とする大和源氏の嫡流とされる一族で、奈良盆地の南部（桜井市・葛城市・橿原市など）一帯を領し、南都の東大寺・興福寺などの勢力と対峙し、当主は代々「源太」を称した。

八尾氏などの祖となった摂津源氏の祖・源頼光は異母兄であったとされるが、頼朝を輩出した河内源氏の祖・頼信は頼親の同母弟という理由から、頼朝はもとよりその走狗となって武家政権を樹立した北条などをどこか見下していた。かれらはその領土に数多く点在する王家の墳墓を護り、武士本来の生業である農耕に精を出した。その源太ら越智一族に対し、越智氏の居城・貝吹山城（奈良県橿原市）を訪れた徴収使の飯沼平左衛門は、例によって鬪犬の餌代を拠出するよう求めた。越智氏の成立など知り得ない飯沼は「ただの田舎者」と高を括り、居並ぶ一族の前で「得宗家被官」の威光をもつて居丈高に要求した。これにはさすがに越智一族も色めき立ち、その場であわや斬撃が展開しようとした、その時、

「さて」の一言で、一族を制した源太が柵の枝の杖を手に立ち上がり、ゆっくりと歩み寄った。双方が固唾を呑むなか、二言目に発した

「かえれ」と共に、その杖で京都の方角を指した。一族も口を揃えて「かえれ」と叫んだ。飯沼は「ふん」と鼻で笑い、意外にもあっさりと退出した。

翌朝、貝吹山城下で大騒動が勃発した。

飯沼に雇われた野盗どもが領内の農家を襲い、農耕に欠かせない牛や馬を略奪して回ったのだ。越智勢はすぐさま領内に展開し、野盗どもと交戦したが、かれらは女子供を盾にするなど、

卑劣なやり方で越智勢を阻んだ。牛馬は檀原神宮の境内に集められ、飯沼の下人らによって荒縄で数珠繫ぎにされている。生きたまま都に運び、鴨川の河原で処理するつもりだ。

「餌代が出せないのなら、餌そのものを出せ——  
飯沼の無言の圧力だった。」

城内に押し掛けた領民らは異口同音に、奪われた牛馬の奪還を訴えた。早馬の報せでは、飯沼たちの牛馬略奪と入れ替わりに越智の所領を攻め取る為の六波羅勢が新ノ口まで来ているとの事だった。その数約一千。もはや躊躇の暇も無い。櫛の杖を手に立ち上がった源太が領民らの前で叫んだ。

「馬曳けい」

齢八十が繰る駿馬が、貝吹山を降り颯の如く駆けてゆく。「元寇」では、蒙古軍の火器「てつほう」を避けながら百道浜の防塁に馬立し、遠矢で船上の敵の將軍を射抜いた。遠い昔のことだ。源太は、追い掛けて来た一族に対し  
「貝吹山はわしらが護る、お前たちは領民を連れて、すぐさま高取山に登れ」

と、命じ、弓持ち一人を従えて檀原神宮の杜を目指した。老人に気付いた野盗どもが、へらへらと笑いながら近付いて来る。それぞれの手には褒美の酒を詰めた瓢箪が握られている。源太は馬腹を蹴り、薙刀を旋回させた。一振り、二振り、三振り：瓢箪を握ったままのかれらの拳と、下卑た笑いを浮かべたままのかれらの首が少なくとも十個は跳んだ。騒ぎを聴いて駆け付けた飯沼の手下ども「おのれ何奴」と抜刀する。

「お前ら下衆どもに、名乗りは無用」

源太は腰刀を抜き、目にも止まらぬ速さで投げた。刀は、飯沼の用心棒と思しき武将の喉に突き立ち、落馬した男の向こうに牛馬の移送を急ぎ立てる下知を発する飯沼の姿をとらえた。

飯沼は社殿を背に源太を嘲笑うかの様に馬首を操っている。社殿に向けて矢を放つことは禁忌だからだ。その時、曳かれてゆく農耕馬の頭が源太を見つけて啼いた。その馬は、源太がかつて領内巡察の為に乗っていた黒馬「さくら」であり、余生を農耕馬として過ごしていた。頭が啼くともう一頭、さらに牛たちも啼き始めた。皆、源太が巡察時に撫でて労をねぎらったものたちだ。

領民と馬と牛と、みんなでこの地で生きて来た。武士たる俺のすべきこととは…

源太は、地に薙刀を突き立て、弓持ちが差し出した重藤の弓に箆の矢を番えた。牛馬たちが飯沼を取り囲み逃げられない様な状態のまま、社殿から外してゆく、怒り狂って抜刀した飯沼が牛馬の背を傷つける。

——南無八幡大菩薩——



源氏の氏神に祈念し放った矢が、飯沼の首を貫いた。馬から飛び降りた源太は、弓持ちに支えられながら、太刀で牛馬を繋いだ荒縄を解くと、かれらは飯沼の残党に襲い掛かり、北へ北へと追いやつてゆく。だが、その背後から六波羅の騎馬武者の一団が姿を現した。源太は、六波羅勢に矢を射掛けながら牛馬の群に「逃げろ」と叫び、自らも馬首を返した。駆けながら、背後の六波羅勢が増えてゆくのが感じた。到着した弓隊の放った矢の一本が弓持ちの背を貫いた。「最早これまでか」と馬首を敵に向けた。迫り来る敵の旗印は「竹に雀」、強兵で知られる足利の一門・上杉だ。

「河内源氏とまみえ、死ぬるは本望」と、馬腹を蹴ろうとした時、聞き覚えのある嘶きと共に、一頭の黒馬が源太を追い抜いた。

「さくら」は農耕馬とも思えぬ俊足を駆って、上杉勢の前に飛び出し、敵の騎馬武者に体当たりを繰り返した。吉野の馬場で仔馬から育てた馬だ。「さくら」は、一度も合戦に出なかったが、源太の仕込んだ馬術を全て覚えていた。頬につたう二筋の熱いものを感じていた時、今度は、逆方向からの馬蹄の轟きを聴いた。高取山から駆け下りて来た味方勢に違い無かった。「さくら」は、敵の弓隊に囲まれ、頭を射られて倒れた。越智勢が上杉勢に襲い掛かる。

先頭を駆けるのは、越智小源太。源太の孫だ。父を早くに失くし、源太が我が手で育てた。厳しく仕込んだ。その小源太が初陣とは思えない薙刀捌きで、敵を圧倒している。繰っている馬は「さくら」の子「小桜」だ。やがて到着した越智の弓隊が一斉射撃を見舞わせると、上杉勢は退却の貝とともに去って行った。

貞顕からの命令書には、―楠木多聞兵衛、大和高取への出陣を命ず―と記されていた。

俊親は、安堵とともに、また初陣の機を逃がした無念さに苛まれた。いつもの食卓では、弥四郎が妻に桂川の橋で出会った土佐犬について話している。

犬は「多聞天」と名付けられた。

俊親は書院に移動し、出陣命令書に添える文を書いた。文面には、六波羅勢と共に出陣する血族・赤松則村への気遣いを怠らぬようにという「嫡男」としての命とともに、こう記した。

―犬に成り下がるな、正成―